総務常任委員会資料
秘書課

議案第 79 号
宝塚市教育委員会教育長の任命につき同意を求めることについて

資料１　任命しようとする者の活動内容や考え方、この者を任命しようとする理由等

１.主な活動内容や実績、考え方について、本人から提出された説明内容は次のとおりです。

（１）公立小学校教諭として

小学校社会科研究に注力し、阪神地区小学校社会科研究会宝塚大会での研究発表や教師向け指導書の執筆にも携わった。また、小学校３・４年生の社会科副読本「宝塚のくらし」の改訂を積極的に進め、子どもたちの興味関心を高める紙面づくりに取り組んだ。

教科書をなぞるだけでなく、社会の動きにも目を向けて日々の授業を工夫することに、教師としての面白みを感じ実践を重ねてきた。子どもたちの主体的な学びは、教師が集団づくりや授業づくりに主体的に取り組むところから始まると経験から学んだ。

（２）兵庫県教育委員会指導主事及び主任指導主事として

県教育行政に携わる中で、著名なアスリートや作家の方と話す機会があり、様々な視点から教育について考える大切さを学んだ。また、国内外の研修に参加したことで、新しい教育の動きや各地の教育事情を知ることもできた。

阪神教育事務所では、宝塚市の教育が宝塚市以外の人々にどのように映っているのかを知ることができた。それは、決して評価されるものではなく、学校・教育委員会と教職員団体との慣例的な関係の中で、学校教育が停滞していると感じた。教育に携わる者には、教育愛に満ちた前向きな姿勢が求められる。新しい時代に生きる子どもたちのためには、現状維持ではなく常に新しい教育を目指さなければならない。「子どもを真ん中に置いた教育」という私の教育信条が、しっかり根付いた時期である。

（３）公立小学校長として

小学校長として宝塚市の教育に再び関わるようになると、学校教育の停滞感や閉塞感を以前にも増して強く感じるようになった。学校教育目標実現のために新たな取り組みを始めようとしても、これまでの教育の在り方をかたくなに守ろうとする組織風土があった。校長がリーダーシップを発揮するには、まず、「子どものための教育」という教育の不易を共通認識するところから始めなければならなかった。そして、子どもを中心に置いた学校教育を組織的に進めることの重要性とその方法を明確に示すことが必要だった。つまり、教職員の意識を変え、目標に向かって一つになる同僚性を創り出すことだ。硬直化した学校風土を柔軟で風通しの良いものにしていくことである。

私は、臆することなく教育について教職員と語り合い、子どもを真ん中に置いた教育課程の見直しを行い、学校の様々な課題解決に向けて組織的に対応する体制づくりを進めてきた。子どもと教職員の笑顔あふれる学校が実現できたことは、校長としての役割を果たせたと自負している。

（４）宝塚市教育委員会学校教育室長及び学校教育部長として

小学校長から宝塚市教育委員会へ異動となり、改めて教育行政の最前線で宝塚市の教育と向き合うことになった。教育現場では日々様々な事案が起こっており、教育委員会はその状況を速やかに把握し、問題解決に向けて支援をする立場にあるが、対応が遅れたり十分な支援が行えず学校現場を混乱させることもあった。子どもたちのために何をなすべきかを前向きに考えることができずに、教職員団体との関係性の中で安易に問題を先延ばしにしてきたこともあったのではないかと思う。教育委員会こそ各担当課が連携して、組織として主体的に対応できる体制をつくらなければならないと強く思っている。学校現場が生き生きとしてこそ、子どもの笑顔は守られる。そのために、学校現場に信頼される教育委員会でなければならない。部長として、指導主事の学校園担当制を実施し、学校園と教育委員会の連携を強めるよう努めてきたが、やりきれなかったことに忸怩たる思いがある。

昨年度末から、教職員団体との関係を見直して、真に教育現場を支えようとしている教育委員会に、新たな宝塚市の教育への希望を感じる。教育委員会の毅然とした対応を止めることなくやりきることが最も重要である。

２.教育委員会が抱える課題にどのように取り組んでいくのかについて、本人のコメントは以下のとおりです。

私は、未来を担う子どもたちの夢に寄り添い、その実現に向けて全力で取り組んできました。そして、子どもたちの笑顔に囲まれ、その成長を手応えとして実感できる教師という仕事に誇りを持っています。ところが、近年の市立学校での重大事案や教職員の不祥事を受けて、宝塚市の教育は、子どもや保護者をはじめ、市民の皆様の信頼を大きく損なってしまいました。全ての子どもたちが大切にされて、安心して過ごせる学校環境を整え、宝塚市の教育の信頼回復に努めることが急務です。私は、課題解決に向けて必要な改革を躊躇なく進め、宝塚市の教育に自信と誇りを取り戻すことが必要だと考えます。

学校は、教職員の当事者意識の欠如や問題を抱え込んで組織的な対応ができないという閉鎖性が指摘されています。また、前例踏襲にとらわれやすく、子どもの気持ちよりも教職員の立場を優先したために間違った対応をすることもありました。このような学校の組織風土は、多様な専門性を持った職員を共通の目標に向かって動かす、学校として全員で協働していく文化を創り出す、という校長のリーダーシップの発揮を妨げてきました。生き生きとした学校教育を展開するためには、校長のリーダーシップのもと教職員が主体的に学校運営に参画することが重要です。また、外にも内にも学校を開き、みんなが一つの目標に向かって取り組む組織的な対応をより強化する必要があります。子どもは、教師の背中を見ています。主体的に考え行動する教師がいてこそ、そのような教師がいる学校であるからこそ、子どもは自分の頭で考え行動する力を身につけていけるのです。

教育委員会に問われているのは、硬直化した宝塚市の学校組織をいかに改革するかということです。その改革の一丁目一番地は、宝塚市特有の学校・教育委員会と教職員団体との関係性の改善です。教育委員会が、これまでの取り決めやそれに基づく取扱にとらわれず、「子どもを中心に置いた

教育」の在り方を毅然として示すことが何よりも重要です。宝塚市の教育に携わるすべての人々が教育に対する熱い思いを共有し、新しい教育の在り方を模索していく中で、多様な子どもたちに応える教育の在り方が導き出されると考えます。その際の基本姿勢は、「子どもを中心に置いた子どものための教育」の実現です。このことは、いつの時代にも教育の不易として大切にされるべきことです。同時に、新しい時代に対応できる日本型学校教育の構築を目指すことも忘れてはいけません。私は、風通しのよい学校風土を醸成し、子どもたちの未来を生きる力を育むことで、宝塚市の教育に対する信頼回復が果たせると考えます。

このような改革を進める中で、コミュニティ・スクールの取組を中心に社会総がかりの教育をさらに充実させます。また、豊かな自然・文化・人材に恵まれた宝塚で、人生 100 年時代を迎え、市民がいつでも、どこでも、気軽に学ぶことができるよう、公民館や図書館等の社会資源を充実させ、情報の提供や学びの機会拡大に努めます。さらに、文化遺産の保存継承や活用に努め、市民の文化意識の向上に努めるとともに、スポーツ施設の整備、イベントの開催、団体等の支援により市民のスポーツ活動の活性化を図ります。

私は、教育長として、教育改革を止めることなくやりきる覚悟と新しい時代に対応した教育の実現を切り拓く気概を持って「自分を大切に　人を大切に　ふるさと宝塚を大切にする人づくり」に邁進します。

３.この者を任命しようとする理由

今回任命しようとする者は、宝塚市で 21 年間教師として勤務し、その後、兵庫県教育委員会指導主事を 6 年、その能力と成果を認められ、主任指導主事として 2 年間、県内の教育委員会を指導支援する立場として務めました。宝塚市に戻ってからは、宝塚市教育委員会学校教育室長、学校教育部長を歴任し、宝塚市の教育行政の推進に力を注ぎました。

また、校長職では中山桜台小学校、良元小学校を歴任し、保護者や地域から信頼される学校づくりを実践しました。

現在、宝塚市教育委員会学校支援チームの一員として学校運営の相談や指導を担っていますので、宝塚市の教育の実態を把握し、課題についても深く認識しており着実に改革を推し進めていくものと期待しています。

教育に対する情熱と教育行政の豊富な経験から冷静に事実を精査し判断、決断して牽引していく人物であり、本人がこれまでに培ってきた経験と識見から、教育長として適任であると考えます。